

平成27事業年度「業務の実績に関する評価結果」における評価委員会意見への対応状況について

区分	項目別評価【特記事項】における課題・意見（小項目番号） [委員会評価]	掲載頁	各関係部局等における対応状況
教育	<b>【全学共通教育推進体制の強化】(No.13) [3]</b>		
	<ul style="list-style-type: none"> <li>平成28年度から開始する科目等が所期の目的・効果を発揮しているかについて、十分に検証し、必要があれば速やかに改善方策の検討をされたい。</li> </ul>	9	<ul style="list-style-type: none"> <li>総合教育センターの部門会議（全学共通教育・高等教育推進）において、関係科目の全学協力体制を確認し、学部・学科との連携を強化した。具体的には、「地域の理解」「地域情報発信論」「県大生として学ぶ広島と世界」の担当教員数の増員を図った。</li> <li>対話と体験を重視し教育効果を高める観点から、関係科目における履修者数（クラス規模）の適正化を図るとともに、教育方法の見直しを行った。具体的には、「地域の理解」においてグループによるフィールドワークの成果発表にポスターセッションを加えて活性化を図ったほか、科目区分「広島と世界」の中に「宮島観光学（英語）」を新設した。</li> <li>引き続き、授業評価アンケートの結果等に基づく検証と改善に努める。</li> </ul>
	<b>【副専攻プログラムの導入と他学部履修等の促進】(No.14) [3]</b>		
	<ul style="list-style-type: none"> <li>副専攻プログラムについて、個々の科目の履修状況を踏まえた検討を行っているが、所期の目的の達成状況に係る検証が早期に開始できる方法の検討、実施を図られたい。</li> </ul>	9	<ul style="list-style-type: none"> <li>副専攻プログラム「異文化間コミュニケーション認定プログラム」の円滑な運用に向けて、29年度から開設する科目「教養ゼミナール」（必修）の開講に向けた準備を行った。</li> <li>同プログラムに係る自由選択枠の活用を促進するため、対象科目（英語の上級者向けクラス等）を増設するとともに、当該枠の対象となる科目（教育ネットワーク中国提供単位互換科目、学部開放科目）の整理を行い、学生への周知に努めた結果、関係科目の登録者数の増加が認められた。</li> <li>引き続き、上記センター部門会議において、所期の目的の達成状況に係る検証を行う。</li> </ul>
<b>【社会人の受入れ促進】(No.20) [2]</b>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>社会人向けの講座等の開発に向けて計画していた履修証明制度について、他大学調査や導入に向けた検討を進めることができなかった、また、社会人特別選抜により入学した在学生の状況調査や課題検討ができなかったという課題がある。</li> <li>□ 平成28年度は、履修証明制度の導入についての検討、社会人特別選抜入学生に係る課題検討等がこれ以上遅れることがないよう、優先的に取り組まれたい。</li> </ul>	9～10	<ul style="list-style-type: none"> <li>当該制度の導入状況を調査した結果、近隣の大学や公立大学では、資格取得に直結した分野において導入が進んでいることが分かった。また、各学部・学科に対して導入の可能性について調査を行った。その結果を踏まえ、導入に向けた検討を継続することとした。</li> <li>社会人の受入れ促進に資する取組の一環として、公開講座受講者に対して科目等履修生等の情報を掲載したリーフレットの配布を再開し、一定の成果があった。</li> <li>既卒者、卒業予定者を含む過去5年間の社会人特別選抜入学生23人を対象に、学修状況調査を実施した。その結果、総じて学修意欲が高く学修状況も良好で、特段の課題は認められなかった。引き続き、個々の学生の事情に対応したきめ細やかな支援を行う。また、社会人の受入れ促進に係る検討を継続している。</li> </ul>	

区分	項目別評価【特記事項】における 課題・意見（小項目番号） [委員会評価]	掲載 頁	各関係部局等における対応状況
教育	<b>【定員充足率の改善】(No.22) [4]</b>		
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ イングリッシュトラックについては、入学者がいなかったことを受け、次年度入学者の確保に向けて、入学金の減額と納入時期の変更を決定するとともに、新たに情報マネジメント専攻においてもイングリッシュトラックの導入を決定したところであるが、今後、入学者の確保に資する取組の実施や効果検証等を行い、同制度において、入学者の持続的な確保につながるよう努められたい。</li> </ul>	10	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 選抜区分「イングリッシュトラック」による平成 28 年度秋季募集を行い、情報マネジメント専攻に 1 人の留学生が入学した。</li> <li>・ 総合学術研究科の 2 専攻と国際交流センターが協力し、協定締結大学への情報提供（学生支援や教育・研究内容等）の強化、受験しやすい環境整備の一環として選抜試験実施日の繰り上げ、協定校の拡大に取り組んだ。</li> <li>・ 情報マネジメント専攻に特任教授 1 人を配置し、国際交流センターとの連携のもと、イングリッシュトラックを含む受入留学生支援事業等の内容の充実を図ることとした。</li> </ul>
	<b>【卒業時に保証する能力水準の具体化とその確保】(No.23) [3]</b>		
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 卒業時に保証する能力水準やその力の具体化についてさらに推し進め、全ての学生に保証する力として学内外に明示できるよう、学内での検討を進められたい。</li> </ul>	10	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 総合教育センターと教育改革推進委員会等が連携し、全学人材育成目標に基づく全学の 3 つの方針（学位授与方針、教育課程の編成・実施に係る方針、入学者受入方針）の見直しを行い、平成 29 年 3 月末に公表した。 (ウェブ・サイト：<a href="http://www.pu-hiroshima.ac.jp/soshiki/47/policy.html">http://www.pu-hiroshima.ac.jp/soshiki/47/policy.html</a>)</li> </ul>
	<b>【英語力の全学的な養成】(No.24) [3]</b>		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 中期計画期間数値目標の達成に向け、引き続き、TOEIC 受検促進策の実施や効果検証等を行い、英語力の全学的な向上につながるよう努められたい。</li> </ul>	10	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ TOEIC 受検料補助制度の運用を継続し、受検率の向上を目指した。また、学修意欲と語学能力の高い学生がハイレベルクラスを受講できる制度の運用を開始した。</li> <li>・ 引き続き、総合教育センターにおいて受検率や得点状況等に基づく検証を行い、学科の特性を考慮した指導のあり方を模索する。</li> </ul>	
<b>【国家資格のための実習や地域活動を通じた学生の社会的自立の支援】(No.26) [3]</b>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 事前・事後学修の取組が学科により差があることから、今後は、先行している学科の取組を参考として、事前・事後学修を強化し、全学的に拡大させ、実習、実践活動が学生の社会的自立に必要な資質や素養、主体性や責任感などの育成</li> </ul>	11	<b>【人間文化学部】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 国際文化学科において、履修指導等の取組により正課科目「インターンシップ」の履修者数が前年度の 15 人から 29 人に増加した。また、教員を目指す学生が、広島市教育委員会主催の平成 28 年度「大学生による学校支援活動」に参加し、宇品中学校において学習支援を行うなど、様々な活動を体験した。(登録学生数 17 人。経営学科の学生 1 人を含む。)</li> </ul>	

区分	項目別評価【特記事項】における課題・意見（小項目番号） [委員会評価]	掲載頁	各関係部局等における対応状況
教育	につながるよう一層努められたい。		<p>・健康科学科においては学外臨地実習の履修率が 100%であり、地域の食育講座等にも学生が積極的に参加した。主な取組内容の概要は次のとおり。</p> <p>① 「地域保健臨地実習」における取組：事前指導の一環として、乳幼児対象の模擬教室を学内の教職員に公開し、参加者の意見により教育法の技術的な改善につなげるなどの効果が得られた。また、事後指導の一環で実施する報告会において従来型の発表と質疑応答に加え、ワールドカフェを行い学生間の学びの共有化を図った。その結果、実習施設ごとの特徴を知ることができ目指す管理栄養士像の具体化、次年度実習生の実習に対する心構えの涵養に効果が認められた。</p> <p>② 公民館での料理教室の開催：学生参加の料理教室を2回開催した。この過程で、1回目の実施状況を検証し、2回目の開催の改善に活かし、2回目実施後に総合的な評価を行った。</p> <p>③ 「広島市食育プロジェクト」及び学校給食メニューの開発：同プロジェクトへの学生参加がきっかけとなり、カゴメ（株）中四国支店及び竹原市と連携した学校給食のメニュー開発を行い、この活動が新聞・テレビ報道、竹原市広報誌で取り上げられた（別紙資料）。</p> <p>④ 「広島は、レモンで健康じゃ！シンポジウム」参加：健康科学科の学生12人（2年次生9人、4年次生3人）が参加し、レモンを使った料理・お菓子のレシピ提案、シンポジウムでの発表、レモンを使ったお菓子「レモンスコーン」の試作及び提供を行った。</p> <p>⑤ 「Calbee 新商品開発プロジェクト」参加：3種類の新規ヒット商品の開発を目標に、圧倒的顧客視点（徹底的に生活者を知りつくし、生活者と共に商品を作りあげる）といったコンセプトのもと、現在、健康科学科の2年次生15人が一般消費者700人へのインタビューに挑戦している。この取組により、インタビューやディスカッションのノウハウ、企業での商品開発の実際など、現場に近い体験を通して、企業で重要視される力の修得に努めている。</p> <p>・上記の取組を含めて、学外実習運営等WGにおいて事前・事後指導の改善に努めている。</p> <p>【経営情報学部】</p> <p>・学部重点事業「学外実習型専門演習による研究力・実践力向上の取組」を通じて、アクティブ・ラーニングの要素を専門演習にも取り入れ、教育の質的向上と学生満足度の向上を目指した。具体的には、専門演習などの教育・研究活動において、企業、市町及び地域連携センターと連携・協働し、地域課題解決や地域活性化の取組（地域戦略協働プロジェクト）に学生が積極的に参画した。</p> <p>・中国経済連合会との共催で「ビジネスアイデア創出・プラン作成セミナー」を開催し、経営情報学科4年次生1人、経営学科1年次生3人がビジネスプランの作成に取り組み、経営学における課題解決能力、論理的思考力等の実践力の涵養に努めた。</p> <p>・経営情報学科において、情報処理技術者試験の受検を奨励し、基本情報10人、応用情報1人、情報セキュリティマネジメント1人が合格した。</p>

区分	項目別評価【特記事項】における課題・意見（小項目番号） [委員会評価]	掲載頁	各関係部局等における対応状況
教育			<p>【生命環境学部】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生命環境学部の学生が卒業論文の研究として、庄原産のブドウ果実から分離された酵母を用いて特産品の開発（低アルコール発酵飲料やパン等）に挑戦し、その成果発表会、試飲・試食会において庄原市長等の多数の参加者から高評をいただき、学生のモチベーションの向上につながった（平成 29 年 2 月 7 日中国新聞 α 掲載）。また、フィールド科学教育分野での卒業研究の公開発表会において地域からの大きな期待や激励が寄せられ、学生は自らの取組の重要性を再認識した。</li> <li>・Eco 検定に合格し Eco people に認定された環境科学科の学生 10 人が、その活動の一環として、西城川漁業協同組合の主催で実施された西城川清掃ボランティア（平成 28 年 4 月 10 日）などの地域活動に参加し、社会的自立に向けた資質や主体性の涵養に努めた。</li> </ul> <p>【保健福祉学部】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・看護学科において、地域包括ケア推進に貢献できる人材の育成の一環として、「老年看護学概論」のフィールドワークで調査対象地域の医療福祉シーズとニーズを調べ、学生が公開授業で成果を発表した。また、統合実習により、卒業後の臨床実践のイメージ化を図った。</li> <li>・理学療法学科において、臨床実習指導者会議及びワークショップを開催し、新規実習施設 1 件を開拓した。（50 施設，51 人参加）</li> <li>・作業療法学科において、臨床実習指導者会議を開催した。（34 施設，35 人参加（卒業生 9 人））</li> <li>・コミュニケーション障害学科の学生が、三原市の失語症友の会、広島市の高次脳機能障害友の会の定例活動において、企画運営に参画した。また、卒業研究において、広島県内の回復期リハビリテーション病棟をもつ病院に勤務する言語聴覚士を対象に、チーム医療の効果と課題に関する調査に取り組んだ。</li> </ul>
	【一貫した学士課程教育の推進】(No.29) [2]		
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学部生の卒業時の満足度については、学生による大学の総合的評価ともいえる重要な指標であるが、目標数値に届いておらず、数値も年々低下し、一部学科においては調査の回収率が低いなどの課題がある。</li> <li>□ 学部生の卒業時の満足度に係る課題に対しては、早急な分析と対策の実施に取り組まれない。</li> </ul>	11	<ul style="list-style-type: none"> <li>・卒業予定者アンケート（満足度等調査）の回収率を向上させるため、教授会等での趣旨説明の強化、指導教員からゼミ学生に対する提出を促す指導の徹底、卒業予定者全員が参加する卒論発表会での調査の実施、国家試験の受験票配付時に調査を実施するなど、各学部・学科の実状を考慮した取組・改善を行った。</li> <li>・各学部・学科等の単位で学生満足度の結果を分析し、履修マニュアル等を用いた履修指導の強化、キャリア・ポートフォリオ・ブックを活用したチューターによる個別指導、授業内容の改善、演習・実験等の授業における TA の活用、最新の設備の活用、学生の計画性・自発性に留意したきめ細かな卒業論文指導等により、学修効果の向上を図った。</li> </ul>

区分	項目別評価【特記事項】における 課題・意見（小項目番号） [委員会評価]	掲載 頁	各関係部局等における対応状況
教育	<b>【社会的評価を有する審査・試験の積極的な活用による学修成果の検証】(No.30) [2]</b>		
	<ul style="list-style-type: none"> <li>専門分野に応じた各種資格・検定試験等（TOEIC, 中国語検定2級, 情報処理技術者試験, 中級・上級バイオ技術者試験等（上記国家試験は除く））について、一部の試験を除き、受検者数及び合格率・得点率が伸び悩んでいるという課題がある。 各種資格・検定試験等の受検者数の増加及び合格率・得点率の向上につながる動機づけや仕組みの改善などに取り組まれない。</li> </ul>	11	<ul style="list-style-type: none"> <li>国際文化学科において、TOEIC 受検の義務化, 中国語・韓国語検定の受検促進に取り組み, 平成29年度からは中国語・韓国語についても検定受検料を補助することとした。</li> <li>経営学科において、資格・検定試験に関する情報を学生に提供するとともに、受検・合格情報を収集・分析し、学生支援の方法を議論した。また、公認会計士制度・税理士制度及び試験対策等に関する説明会（約50人参加）や日経 TEST 受検者を対象とする勉強会を実施した。</li> <li>経営情報学科において、情報処理技術者試験に関する情報等を学生に提供するとともに、団体受検の窓口を継続して設置した。また、受検者を支援するウェブ・サイト及びeラーニング教材の内容の充実を図り、学生の学内外における主体的学修を支援した。併せて、勉強会を随時実施した。</li> <li>生命環境学部において、中級・上級バイオ技術者試験の受検を促進した結果、中級の受検者数（77人）、合格者数（68人）がともに増加し、合格率（88%）も前年度比で10ポイント上昇した。</li> <li>保健福祉学部の学生が、福祉住環境コーディネータ（4学科46人）、全国手話検定試験（2学科5人）、要約筆記、メディカルクラーク、重度訪問介護、障害者スポーツ指導員資格、保育士等を受検し、資格を取得した。</li> </ul>
	<b>【経営学分野の機能強化】(No.36) [4]</b>		
	<ul style="list-style-type: none"> <li>今後とも、MBA が良好に運営され、成果につながるよう注力されるとともに、MBA をはじめとする優れた人材育成の取組を前面に押し出して、大学の存在感をますます高めるよう努められたい。</li> </ul>	12	<ul style="list-style-type: none"> <li>経営管理研究科において、①教育プログラムの充実に資する意見交換会の開催、②教育組織の充実、③地元金融機関の取引先をターゲットとした学生募集活動等に取り組んだ。</li> <li>学外諸機関と連携した取組として、世界経済会議ネットワークイベント、東京都墨田区の協力も得た首都圏でのセミナー、地域媒体誌と連携したワークショップ、県立広島病院・広島県医療介護人材課と協力して実施したセミナーの開催等により、研究科とその取組内容を幅広く発信した。</li> <li>志願者増につながる取組の一つとして、同研究科の正規授業科目を1科目から受講できる「科目等履修生制度」の運用（募集）を開始することとした。</li> </ul>
<b>【実践力のある助産師の養成】(No.38) [2]</b>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>平成28年度入学者選抜結果において、定員15人に対する充足率が46.7%と低位であるという課題がある。 定員充足率に係る課題に対しては、改善に取り組まれない。</li> </ul>	12	<ul style="list-style-type: none"> <li>助産学専攻科の入学定員を15人から10人に変更し、平成29年度入学者選抜においては、募集人員10人に対し志願者数35人、合格（入学）者数10人で、定員充足率は100%になった。</li> </ul>	

区分	項目別評価【特記事項】における 課題・意見（小項目番号） [委員会評価]	掲載 頁	各関係部局等における対応状況
教育	<b>【海外留学等の促進】(No.40) [4]</b>		
	<ul style="list-style-type: none"> <li>取組の効果を検証するため、現在も学生に対して留学前後の TOEIC 等受検や、留学後の英文による成果報告書の提出の義務づけ等を行っているが、海外留学プログラムの教育効果を確認・向上させるために、今後ともさらに精度の高い効果検証に取り組まれない。</li> </ul>	12	<ul style="list-style-type: none"> <li>国際交流センターと各学部等が連携し、留学経験者の TOEIC スコアの推移の確認などを継続した。国際文化学科では、長・短期留学派遣事業に参加した学生が韓国語能力試験を受検し合格した。(28年度上級4人、中級1人) また、27年度と28年度の協定校(ソウル市立大学)派遣事業が、次年度の長期留学につながっていることを確認した。(28年度:2人、29年度:4人)</li> <li>保健福祉学部では、2年次にシェフィールド大学に留学した経験を有する4年次生(1人)が、英国の大学の大学院への進学を決定した。</li> <li>効果検証に係る新たな取組の一つとして、留学の学修成果を客観的に測定するための心理分析テストの導入について検討することとした。</li> </ul>
	<b>【学修支援】(No.44) [3]</b>		
	<ul style="list-style-type: none"> <li>標準修業年限以内における退学者の割合について、一部の学科に増加がみられることから、詳細な原因の分析と対策に取り組まれない。</li> </ul>	13	<ul style="list-style-type: none"> <li>当該退学者については、心身の不調等によるものであり、やむを得ないケースが多いと判断しているが、引き続きチューターによる担当学生に対する定期的な個別面談を行うなど、きめ細かな対応や個別支援を行っている。</li> </ul>
研究	<b>【競争的資金の獲得支援】(No.57) [4]</b>		
	<ul style="list-style-type: none"> <li>大学間や研究者間における研究資金の獲得競争が激化する中、科学研究費補助金をはじめとする研究資金の獲得に向けて、人的支援や、研究準備費の予算化など、さらなる支援環境の整備について検討されたい。</li> </ul>	14	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域連携センターに、平成29年度から新たに「リサーチ・アドミニストレーター」を配置するとともに事業推進担当室を新設し、同センターの体制の強化を図り、本学の知的資源等の地域への還元、外部資金の獲得及び共同研究等を積極的に推進することとした。</li> <li>科研費及び外部資金の獲得を支援するため、独自予算の計上による重点研究事業の学内公募を実施し、萌芽的な研究を支援している。また、研究計画調書学内開示制度の運用及び参考図書の出等により、応募書類の質の向上を図っている。</li> </ul>
地域貢献	<b>【地域課題解決に資する人材育成プログラムの開発・提供】(No.62) [2]</b>		
	<ul style="list-style-type: none"> <li>社会人向けの講座等の開発に向けて計画していた履修証明制度について、他大学調査や導入に向けた検討を進めることができなかったという課題がある。□平成28年度は、履修証明制度の導入についての検討等がこれ以上遅れることがないよう、優先的に取り組まれない。</li> </ul>	15	<ul style="list-style-type: none"> <li>No.20 に記載のとおり。</li> </ul>

区分	項目別評価【特記事項】における 課題・意見（小項目番号） [委員会評価]	掲載 頁	各関係部局等における対応状況
地域 貢献	<p>【地域貢献・連携活動への学生の参加促進】(No.71) [3]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>引き続き、学生の主体的な地域貢献・連携活動への参加を促すとともに、モデルケースで取り組んだ活動を通じた学生の学修成果や成長、地域の活性化、並びに事業の有効性等に係る検証作業について、今後、他の取組へ拡大するよう努められたい。</li> </ul>	16	<ul style="list-style-type: none"> <li>ボランティア活動助成制度の運用により、広島市及び海外（ドイツ、ベルギー）における4件のボランティア活動を支援し、参加学生の自発性や社会性等の涵養に成果が認められた。</li> <li>全学共通教育科目「広島と世界」科目群については、地域活動を重視する授業内容とし、学内外への学修成果の積極的な発信に努めている。</li> <li>国際文化学科の学生3人が広島韓国教育院・広島県日韓親善協会主催の「第11回 日韓広島マダンスピーチ&amp;交流会」に参加し、大賞の「駐広島大韓民国総領事館賞」や銅賞を受賞した。</li> <li>健康科学科においては、正課内・外で多様な活動実績（No.26 参照）があり、既に学生の学修成果や成長に係る検証が行われている。また、同学科学生団体（県立広島大学ヘルス・ネット）の継続的な食育活動が、第11回全国食育推進大会（福島）において農林水産大臣表彰「食育推進ボランティア表彰」を受賞した。</li> <li>経営学科の学生が全国規模の旅行プランコンテストに参加し、「大学生観光まちづくりコンテスト2016（大分ステージ）」でJTB賞を、「同コンテスト（大阪ステージ）」で観光庁長官賞を受賞するなどの成果をあげた。</li> <li>経営学科と経営情報学科の学生が、江田島市との地域戦略協働プロジェクト「自治体のオープンデータ化推進モデル構築プロジェクト」に参加し、同市内運行バスの時刻表や停留所等の情報をオープンデータとして公表するための現地調査を行い、時刻検索やナビゲーションを可能にし、同市役所で成果を報告した。（<a href="http://www.pu-hiroshima.ac.jp/soshiki/renkei/renkeipjh28.html">http://www.pu-hiroshima.ac.jp/soshiki/renkei/renkeipjh28.html</a>）</li> <li>生命環境学部の学生が卒業論文の研究として、庄原産のブドウ果実から分離された酵母を用いて特産品の開発（低アルコール発酵飲料やパン等）に挑戦し、その成果発表会、試飲・試食会において庄原市長等の多数の参加者から高評をいただき、学生のモチベーションの向上につながった（平成29年2月7日中国新聞α掲載）。また、フィールド科学教育分野での卒業研究の公開発表会において地域からの大きな期待や激励が寄せられ、学生は自らの取組の重要性を再認識した。</li> <li>保健福祉学部の学生が専門性を生かした地域貢献・連携活動に参加した。具体的には、三原市チャンネルの「市民いきいき健康ひろば」の番組作成、「さつき祭り」の運営（参加学生数延べ390人）、「三原やっさ祭り」出場（同248人）、「三原福祉祭り」への参加等で、三原市障害者の父親会と合同で開催した「ビーチバレー交流大会」（同70人）の活動は、「小さな親切」運動三原支部から表彰されている。何れの活動も、三原市民から「地域の活性化につながる」と高く評価されている。</li> </ul>
	大学 運営	<p>【組織運営に係る留意事項と体制の強化】(No.73) [3]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>引き続き、理事長のリーダーシップの下で、教職員に対して、大学全体として組織的に教育を行う意義や、大学として</li> </ul>	17

区分	項目別評価【特記事項】における 課題・意見（小項目番号） [委員会評価]	掲載 頁	各関係部局等における対応状況
大学運営	の目標に対する共通理解を深めるとともに、組織への貢献に対する意識を一層高めるよう努められたい。		リーダーシップ発揮を組織的にも支えることで、教職員の意欲醸成・意識改革を図るよう努めた。 ・職員については今年度から本格実施している目標管理制度の運用を通じて、共通理解、組織貢献を図った。
	<b>【教員業績評価制度の適切な運用】(No.78) [3]</b>		
	<ul style="list-style-type: none"> <li>引き続き、平成29年度に正式導入できるよう、教員業績評価制度の給与等への反映に向けた取組の推進に向けて着実に努められたい。</li> </ul>	17	<ul style="list-style-type: none"> <li>教職員を対象とした当該制度の説明会を各キャンパスで開催し、給与等への反映については、当面、勤勉手当を対象として実施することを説明した。</li> <li>平成29年度の円滑な正式導入に向けて、平成28年度の試行の着実な実施を期すとともに、業績評価システムの改修を行った。</li> </ul>
	<b>【戦略的広報の展開】(No.82) [3]</b>		
	<ul style="list-style-type: none"> <li>引き続き、県立の大学として、受験生はもとより、広く県民に大学の活動を知ってもらうための積極的なパブリシティ（マスメディアの活用）等に努められたい。</li> </ul>	18	<ul style="list-style-type: none"> <li>本学ウェブ・サイトやSNS等での情報発信を継続するとともに、これまで以上に本学の特色・魅力の発信の強化に努めた。またTV・新聞等での報道回数の更なる拡大に向けて、積極的なプレスリリース等を行った。</li> </ul>
	<b>【外部資金の獲得】(No.84) [4]</b>		
	<ul style="list-style-type: none"> <li>外部資金獲得につながる受託研究・共同研究等をさらに推し進めるため、大学のシーズと産業界のニーズとのマッチングに一層努められたい。</li> </ul>	18	<ul style="list-style-type: none"> <li>外部資金獲得推進のため、研究テーマを設定して共同研究を行う「プロジェクト研究センター」を新たに設置・運営した。また、「研究助成金マッチングシステム」の運用を4月から開始し、関係学部・学科等の教員にマッチング情報を積極的に提供した。</li> <li>地域連携センターに、平成29年度から新たに「リサーチ・アドミニストレーター」を配置するとともに事業推進担当室を新設し、同センターの体制の強化を図り、本学の知的資源等の地域への還元、外部資金の獲得及び共同研究等を積極的に推進することとした。(No.57再掲)</li> </ul>
<b>【到達目標の可視化と各種データ・資料の収集】(No.90) [3]</b>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>大学の運営状況は経年で比較できることが重要であり、単年度で終わらせるのではなく、今後とも取組の継続に努められたい。</li> </ul>	18	<ul style="list-style-type: none"> <li>関係部局において、財務状況を含むアニュアルレポートを作成し、各種データや収入額、財務指標の経年推移をグラフ化するなどして分かりやすい情報発信に努めた。今後ともこの取組を継続し、公表内容の更なる充実に努める。</li> </ul>	

区分	項目別評価【特記事項】における 課題・意見（小項目番号） [委員会評価]	掲載 頁	各関係部局等における対応状況
大学 運営	【自己点検・評価実施と評価結果の活用】(No.91) [3]		
	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己点検・評価に当たって定めた評価規準・評価基準についてその精度をより一層高めるとともに、全ての項目について自己点検・評価の客観化に努められたい。</li> <li>そうして得られた各年度の自己点検・評価結果を今後の改善につなげ、第二期中期目標の達成を目指されたい。</li> </ul>	18	<ul style="list-style-type: none"> <li>年度計画策定において、評価規準及び評価基準3を意識した具体的な計画の立案に努めた。</li> <li>第二期中期目標の達成に向けて、第二期中期計画の履行状況に係る中間点検を自主的に実施し、抽出した優れた実績と今後の課題をもとに、平成29年度の年度計画及び重点事業を策定した。</li> </ul>

## 学生の主体的な地域貢献・連携活動を通じた地域の活性化及び学生の成長に関する検証の試み

【健康科学科】

事業・取組の名称・概要等	参加学生による取組の成果等	連携機関等
<b>【「もっと知ろう！うまい竹原☆」レシピの共同開発・普及活動】</b>		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・健康科学科4年次の学生3人が、広島市食育推進会議の事業「20代のための食育プロジェクト」に参加したことがきっかけとなり、竹原市保育所給食の新メニュー「和風トマトじゃが」「ごろっとじゃがいも☆ぶりのトマトソースがけ」のレシピを、カゴメ株式会社中四国支社及び竹原市と共同で開発した。</li> <li>・同メニューが竹原市保育所給食に採用されたことから、平成28年11月14日、竹原市保育所調理員向け講習会へ参加した。調理員さんと一緒に調理することにより、実際に大量調理したときの課題などを指摘していただいた。</li> <li>・平成28年12月7日、竹原市保育所給食で同メニューが初公開された。公開日には竹原市内の保育所を訪問し、食育の講演を行うとともに、子どもたちとともに給食を食べ、子どもたちの喫食状況を観察した。</li> <li>・平成29年2月3日、県庁の食堂において「和風トマトじゃが」を提供した。2つのメニューのレシピを掲載したチラシを配布し、竹原市産食材及び2つのメニューのPR活動を行った。</li> <li>・平成29年3月7日、一連の取組の総括となる発表を、フジグラン広島で開催された上記推進会議主催の「食育プロジェクト・ポスターセッション」において行った。</li> <li>・以上の取組の概要を、健康科学科のホームページに随時掲載し（ウェブサイトの一部を以下に紹介）、事業成果の公表に努めた。本取組の一部は、新聞・テレビ報道、竹原市広報誌でも紹介されている。</li> </ul> <p><a href="http://www.pu-hiroshima.ac.jp/site/cultural/kenko20160916.html">http://www.pu-hiroshima.ac.jp/site/cultural/kenko20160916.html</a>  <a href="http://www.pu-hiroshima.ac.jp/site/cultural/kenko20170112.html">http://www.pu-hiroshima.ac.jp/site/cultural/kenko20170112.html</a>  <a href="http://www.pu-hiroshima.ac.jp/site/cultural/kenko20170112-2.html">http://www.pu-hiroshima.ac.jp/site/cultural/kenko20170112-2.html</a>  <a href="http://www.pu-hiroshima.ac.jp/site/cultural/kenko20170222.html">http://www.pu-hiroshima.ac.jp/site/cultural/kenko20170222.html</a></p>	<p><b>【取組を通じて学生が感じたこと・得たもの】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・広島市食育推進会議の事業に参加することで、多くの参加機関（大学・企業等）を調整する大変さと、連携することで取り組みが大きくなることを実感した。</li> <li>・メニュー（レシピ）の共同開発を通じて、企画案の作成と説明、広報の仕方、レシピ作成、議事録・報告書の作成等、企業の方々の仕事の進め方を直に見ることができ、レベルの高さ・周到さに驚いた。社会（企業）で働くことの一端を、模擬体験することができた。何れも、大学での講義や実習では体験できないことで、この事業に参加して、プレゼンテーションの仕方、書類の作成など、大学生活の中でも活かせ、社会に出ても参考になる貴重な体験・学習ができた。</li> <li>・この取組では幼児から高齢者まで幅広い年齢層の方々に関わることができた。普段関わるのが少ない年齢層の方々とコミュニケーションを取ることに難しさを感じたが、少しずつコミュニケーションが上手く取れるようになったと実感した。幅広い年齢層の方々にうまく伝えることの難しさも感じたが、それ以上に楽しさを感じ、卒業後も職場や地域で食育活動を継続したい、と思うようになった。</li> </ul> <p><b>【総括と評価】</b></p> <p>活動状況や試食・来場者の声、参加学生の振り返りから、地域での連携活動が学生の成長を促進し、社会人への移行を支援していると推察される。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・参加学生： 健康科学科 臨床栄養学研究室・4年次生 3人</li> <li>・連携機関： カゴメ株式会社 中四国支社、 竹原市</li> <li>・協力者： 広島県庁舎食堂 運営業者等</li> </ul>

学生の主体的な地域貢献・連携活動を通じた地域の活性化及び学生の成長に関する検証の試み

【保健福祉学部】

事業・取組の名称・概要等	参加学生による取組の成果等	連携機関等
<b>【看護学科における学生の地域貢献・連携活動について】</b>		
<p><b>【三原市民健康調査】</b>                      ・平成 27 年より地域貢献の一環として、J A 三原まつりの中で三原市民の健康調査を実施した。</p>	<p>・看護学科の学生 5 人が市民 92 人を対象に、血圧、SPO2、骨密度、自律神経とストレス指標などを測定し、市民の健康管理に対する意識の向上に貢献した。</p>	<p>・参加学生： 3 年次生 3 人、 2 年次生 2 人                      ・連携機関： J A 三原</p>
<p><b>【在宅ホスピスボランティア・竹原支部における取組】</b>                      在宅ホスピスボランティア・竹原支部が運営するサロン「つむぎの路」（サロン活動：1 回／週 9:00～16:00）に、平成 26 年度から継続的に、看護学科の学生が参加し、平成 28 年度は次の取組を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>4 年次生 2 人が、自ら時間調整しながらサロン活動「つむぎの路」に定期的に参加した。“若者ならでは”の昼食のメニューの提案・調理、地域で開催するバザー活動の手伝いなども行った。</li> <li>卒業研究テーマ「地域のがんサロン参加を通じてがん体験者が社会的役割を獲得する過程」「地域における住民主体の在宅ホスピスボランティア活動に関する研究」に取り組んだ。</li> <li>卒業研究の成果をサロンで報告した。（3 月 9 日）</li> </ul>	<p><b>【取組を通じて学生が感じたこと・得たもの《学生にとっての成果》】</b></p> <p><b>1) 地域の社会資源に関する知識を実体験から深める</b>                      がん患者やその家族にとって非常に重要な地域の社会資源である「在宅ホスピスボランティア」「地域のがんサロン」の存在やその意義を、自ら学べたことである。代表者やスタッフとしてかかわるボランティアらの思いや信念、役割や大変さなど、生の声を聴き、自ら体験することによって得た学びは、将来看護職として働く際に、患者・家族に役立てることができる。と考える。</p> <p><b>2) 地域における人間関係構築力の向上</b>                      サロン活動への参加を通じて得た成果は、地域における人間関係構築力、傾聴力、調整力の向上である。これまでの、専門領域における隣地実習で培った実践力の統合の場とも言える。交通手段の確保、参加のための日程調整、参加者との関係づくりなども全て学生が主体的に行った。                      また、実習を通じた患者と看護学生、すなわち支援される人と支援者という関係が主であったが、サロン活動では、年齢やその場での役割、関係性も多種多様であった。目上の方に対する尊敬、惜しみなく体験を語って下さることへの感謝の気持ち、自分を信頼し心を開いてくれていることへの自信が芽生えた。</p> <p><b>3) 問題意識と主体性の向上</b>                      各卒業研究のテーマに、社会的背景を踏まえつつも自らの問題意識をもって取り組んだ。自分の卒業研究のテーマに関しては、他者に説明することで自信をもつことができている。各テーマに関する学内での意見交換やサロンでの意見交換によって、さらに自分の考えを深めることにつながっている。</p> <p><b>【在宅ホスピスボランティア・竹原支部代表者及び参加者の声から】</b></p> <p><b>1) 学生の参加によって場がなごみ新しい刺激を感じる</b>                      初々しい学生との交流は、サロン参加者にとって、新鮮でよい刺激となっている。学生は、基本的に礼儀正しく、準備や片付けの手伝いなど、一緒にすることが楽しいと、学生との交</p>	<p>・参加学生： 4 年次生 6 人</p> <p>・連携機関： 在宅ホスピスボランティア・竹原支部</p> <p>・協力者：竹原市社会福祉協議会</p>

事業・取組の名称・概要等	参加学生による取組の成果等	連携機関等
	<p>に関してよい評価をいただいている。</p> <p>2) 学生の卒論への協力は自分たちにとっても勉強になる普段の交流では考えないことでも、卒論を通した素直で率直な学生のインタビューで問いかけることによって、あらためて自分の体験を振り返りその意味を考える非常によい機会となっている。また、在宅ホスピスボランティアを立ち上げた経緯や、がんの体験など、自分の体験が他者に役立つことが嬉しいという声をいただいている。卒論の結果は、ボランティア研修会などで、紹介したい内容も多く、役立てたいというお言葉をいただいているため、学生の許可を得て提供している。</p> <p>3) 将来の医療保健福祉を担う学生の教育に貢献したい</p> <p>学生の受入れは、学生の教育に貢献していると考えている。在宅ホスピスボランティアは、地域包括ケアシステムの一部を担う重要な社会資源である。その中で、学生を受け入れることは、在宅ホスピスボランティアの重要性、地域のサロンの存在、そこに参加している患者・家族・ボランティアの思いや役割を伝える教育であり、貢献したいと考えるようになった。今後とも学生の受け入れの継続を望まれている。</p>	
【理学療法学科における学生の地域貢献・連携活動について】		
<p>【トライアスロン佐木島大会】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>平成28年8月21日三原市佐木島で開催された「トライアスロン佐木島大会」において、理学療法学科総勢63人が、運営ボランティアとして参加した。当日の具体的な業務内容は、給水・補食といった選手のサポート、競技記録の管理補助、表彰式スタッフ、会場整備であった。また、参加学生のうち、3人は大会実行委員会の委員として準備段階から参加した。</li> </ul> <p>【西日本アダプテッドサッカーフェスティバル】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>平成28年9月22日修道大学にて開催された第1回西日本アダプテッドサッカーフェスティバル2016において、理学療法学科2～4年次生23人がボランティアスタッフとして参加した。具体的な業務内容は、会場設営、試合のサポートなどで、併せて、アンブレティサッカーやブラインドサッカーを、選手とともに実際に体験する機会を得た。</li> </ul>	<p>1) 地域活性化への貢献</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>トライアスロン佐木島大会では全スタッフ約200人に対し、本学科からのボランティア参加は、今年度も1/3に上っている。本大会は、佐木島地域おこし・観光に重要な役割を担っているが、現地スタッフから「(本学科からの)参加無しには大会が実施できない」といわれるほど、重要視されている。さらに、参加選手からは学生からの懸命な声援に、非常に発憤させられたとの声を多数頂いた。</li> <li>西日本アダプテッドサッカーフェスティバル2016では、選手約80人、全スタッフ60人に対し、本学科からのボランティア参加は23人であった。イベント開催後には、選手からも「楽しかった」「いろんなところでこんなイベントができればいいね」と好評・感想が聞かれた。</li> <li>三次市での地域戦略協働プロジェクトでは、今年から参加者と学生が同じテーブルで「減塩メニュー」を学ぶ時間が設けられた。参加者の満足度は高く、「来年も楽しみ」との声があった。</li> <li>尾道市での地域戦略協働プロジェクトでは、尾道市シルバーリハビリ体操事業の効果検証を行った。受講前・後の身体的・健康心理学的特性を調査し、受講の意義や取組の重要性理解、さらに受講者の熱意醸成にも寄与した。</li> <li>さぎしま健康推進研究会は参加者にとって年1回の定例行事として受け入れられている。健康意識の向上とともに、社会参加の楽しみを共有できる場として機能している。</li> </ul>	<p>【トライアスロン佐木島大会】</p> <p>参加学生：理学療法学科63人</p> <p>連携機関：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>トライアスロンさぎしま大会実行委員会</li> <li>三原市スポーツ振興課</li> </ul> <p>【西日本アダプテッドサッカーフェスティバル】</p> <p>参加学生：理学療法学科23人</p> <p>連携機関：</p> <p>A-pfeile 広島AFC</p>

事業・取組の名称・概要等	参加学生による取組の成果等	連携機関等
<p>【県立広島大学地域戦略協働プロジェクト：三次市】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>平成28年10月1日三次市福祉保健センターにて、理学療法学科4年次生9人、3年次生8人が「平成28年度 県立広島大学地域戦略協働プロジェクト」に参加した。21人の地域健康サポーターと交流し、身体機能調査に従事した。具体的には、身体計測、筋力測定（体幹、下肢、足趾など）、バランス機能測定、足趾機能測定、骨密度測定などを、各学生が担当し測定及び結果のフィードバックを行った。また、三次市職員による「減塩」をテーマとした講演も地域住民参加者とともに聴講し、食育について見識を広めた。</li> </ul> <p>【県立広島大学地域戦略協働プロジェクト：尾道市】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>平成28年7月4日、7月28日、10月25日、11月1日、11月25日、2月28日の計6回、尾道市瀬戸田地区及び道市浦崎地区において、地域戦略協働プロジェクト事業尾道市シルバリーハビリ体操事業の効果検証に理学療法学科学生延べ18人が参加した。講座受講生約130人と交流を図るとともに、片脚立位保持時間や握力、質問紙調査などの測定補助を行った。</li> </ul> <p>【さぎしま健康増進研究会】</p> <p>平成28年11月3日三原市佐木島にて、さぎしま健康増進研究会に理学療法学科4年次生20人、3年次生12人が参加した。当日は身体計測、筋力計測、歩行能力計測、バランス機能測定などを、各学生が担当し責任を持って測定、結果の伝達を行った。また、計測後には元気さぎしま連絡協議会のスタッフ及び研究会参加者から現地の特産品を用いた昼食をふるまっていたいただき、親睦を深めた。</p>	<p>2) 学生の成長</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>コミュニケーション能力の向上：学内では接する機会に限られる <u>幅広い年齢層の方々と交流</u>する機会となった。交流を通し、自分が経験したことのない相手の立場を思考・想像するトレーニングとなった。この能力は、理学療法士に不可欠といえる。</li> <li>社会性と責任感及び信頼感の重要性を実感：事業の企画運営から業務内容の把握、準備などに携わり、「生きた学び」を体験できた。1つの事業を形にするための積み重ねと一連のプロセスの経験は、<u>学生と社会人の違いに気づき</u>を生じ、社会における責任と信頼の重要性を実感することができた。</li> <li>指示待ちから臨機応変な対応力の育成：課題の提示やレポート提出など、課題を与えられることの多い学内教育とは異なり、その場の状況に応じた <u>主体的な判断力と行動力の必要性を痛感し実践する</u>経験となった。</li> <li>学内教育への回帰と学修意欲の向上：行事への参加に際し、自己の担当する測定機器や歩行補助具の使用方法及びその意義について、学生は <u>自己学修</u>を行っている。3・4年次生にとっては、学内教育内容を復習し、さらに1・2年次生へ教える機会となる。また、<u>学内ではそれぞれの講義内容に準じた縦割りの学習となるが、より横断的・総合的な知識の活用を図る経験と</u>なる。1・2年次生にとっては3・4年次生から学ぶことで今後の予習になるとともに、<u>実践力を備えるために必要な学修姿勢を養う</u>機会となる。</li> <li>具体的な将来展望：行事に参加する理学療法士の地域貢献に間近に触れ、実際の対象者となりうる地域住民と交流することで、自己の将来像に具体性・明確性が増した。また、障がい者スポーツを体験し選手と交流したことで、社会における理学療法士の役割を体験することができた。</li> <li>社会を担う当事者意識の芽生え：様々な世代・背景をもつ人々との語らいを通し、<u>日本の社会システムの展開や問題点、そこで果たすべき理学療法士の役割や機能を体感</u>することができた。さらに、学生自身がよりよい地域社会構築への当事者であると認識した。</li> </ul> <p>【総括と評価】</p> <p>総じて、理学療法学科学生の地域貢献事業は、楽しみながら、チームワークを持って進める経験ができています。こうした活動を通して、学内教育における限界を克服し、豊かなコミュニケーション能力を備え、主体的で実践力のある地域で活躍できる学生の育成に貢献している。また、学生にとっても、学内における学修内容と自己の将来像とを結びつけ、学習意欲の向上に寄与している。さらに、共生社会実現への対策課題をより身近に捉え、当事者意識の獲得につながっている。</p>	<p>【県立広島大学地域戦略協働プロジェクト：三次市】</p> <p>参加学生：理学療法学科17人</p> <p>連携機関：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>三次市地域振興部企画調整課</li> <li>三次市福祉保健部健康推進課</li> </ul> <p>【県立広島大学地域戦略協働プロジェクト：尾道市】</p> <p>参加学生：理学療法学科18人</p> <p>連携機関：尾道市高齢者福祉課</p> <p>【さぎしま健康増進研究会】</p> <p>参加学生：理学療法学科32人</p> <p>連携機関：元気さぎしま連絡協議会</p>

事業・取組の名称・概要等	参加学生による取組の成果等	連携機関等
<b>【作業療法学科における地域作業療法学プロジェクトの取組】</b>		
<ul style="list-style-type: none"> <li>作業療法学科3年の学生（30人）が、平成28年4月から地域作業療法学プロジェクト（学生が地域の課題に取り組む行動型学修）の一環として地域の課題に取り組んできた。</li> <li>中間発表会：平成28年7月6日、13日、25日【三原キャンパス】</li> <li>成果発表会：平成29年1月26日【同上】</li> <li>中間発表会・成果発表会には、プロジェクトにご協力いただいたスタッフや関係者の方々も参加。活発な議論が行われた。</li> </ul>	<p>取組の成果</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>地域では現在、孤独死など公的制度や家族だけでは対応できない様々な問題が発生し、社会や地域全体で取り組むことが求められている現実を実感でき、その対応について真摯に向き合う機会が得られた。</li> <li>行政・民生委員児童委員・関係機関・団体との連携を密にし、地域住民の理解と協力が求められる現実を実感し、地域間の連携の重要性を確認できた。</li> <li>障害のある方やその家族が、住み慣れた地域でどのようにしたらより豊かに生活ができるようになるのか、どのような支援が必要なのかを現実を見据えた中で、現実に沿ってしっかりと考えることができるようになった。</li> <li>中間発表会・成果発表会には、プロジェクトにご協力いただいたスタッフや関係者の方々も参加され、学生からの視点に対し、現実の課題や視点を視野に入れることで、よりしっかりとした視点に修正することができるようになった。</li> </ul>	<p>参加学生：作業療法学科3年次生30人</p> <p>連携機関：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>本町縁側サロンいろは</li> <li>ものづくり工房作ら</li> <li>西宮放課後児童クラブ</li> <li>ドリーキャッチャー</li> <li>小西北住宅</li> <li>スワンベーカーリー</li> </ul>
<b>【作業療法学科におけるRUN伴スタッフとしての運営参加】</b>		
<ul style="list-style-type: none"> <li>平成28年10月23日（日）に作業療法学科の学生6人がRUN伴（らんとも）に参加し、認知症の人とその家族とともに三原キャンパス周辺の約1kmを歩き、次の東広島チームにタスキをつないだ。</li> <li>RUN伴：認知症になっても住みやすい地域づくりを目指して、認知症の人と地域の人がタスキをつないで日本を縦断するイベントで、28年度は北海道から沖縄までタスキが繋がれた。</li> <li>NPO法人認知症フレンドシップクラブが主催</li> </ul>	<p>取組の成果</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>認知症の理解とともに、認知症者が地域でよりよく生きるための啓発活動「伴に生きられる社会づくり」に実際にスタッフとして参加することで、認知症者に対する地域のサポートの重要性を、身をもって体験することができ、それとともに作業療法士の役割である、目標に向かって進む当事者やその家族のサポートについて理解を深めることができた。</li> </ul>	<p>参加学生：6人参加（西田ゼミ）</p> <p>連携機関：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>NPO法人認知症フレンドシップクラブ</li> </ul>

事業・取組の名称・概要等	参加学生による取組の成果等	連携機関等
<b>【コミュニケーション障害学科における三原言語友の会「こだま」・高次脳機能障害友の会「ふきのとう」と本学学生との交流活動】</b>		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・コミュニケーション障害学科1年次の学期末に、三原市失語症友の会「こだま」、広島市の高次脳機能障害友の会「ふきのとう」との交流会を実施し、その後、2～4年次生の多くが各会の定例会に随時参加している。学生は全員、失語症の方の援助を行い、毎回昼食も一緒にとりながら交流を深めている。</li> <li>・コミュニケーション障害学科4年次生全員が、いずれかの会の定例会にて集団コミュニケーション療法を想定した訓練計画を立案し、各担当教員の指導のもと実施している。</li> <li>・毎年、広島県言語友の会に学生と教員がボランティアとして参加し、運営の補助や失語症の方の発表時のサポートなど行っている。</li> <li>・以上の取組の概要を、コミュニケーション障害学科のホームページに随時掲載し(ウェブサイトの一部を以下に紹介)、事業成果の公表に努めた。本取組の一部は、平成26年に広島県知事表彰を受けた。</li> </ul> <p><a href="http://www.pu-hiroshima.ac.jp/site/health/comm-2015tomonokai.html">http://www.pu-hiroshima.ac.jp/site/health/comm-2015tomonokai.html</a>  <a href="http://www.pu-hiroshima.ac.jp/soshiki/communication/comm-chiiki1.html">http://www.pu-hiroshima.ac.jp/soshiki/communication/comm-chiiki1.html</a></p>	<p><b>【取組を通じて学生が感じたこと・得たもの】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・実際に失語症などの方々と接する機会は少なく、学生にとっては貴重な機会となっている。</li> <li>・言語障害をもつ方々やそのご家族と実際に関わることで、日常の困難さや現状を知り、将来の言語聴覚士としての仕事の責任の大きさを実感した。</li> <li>・現場で活躍している言語聴覚士の方と話したりして、ますます言語聴覚士という仕事に魅力を感じるきっかけとなった。</li> <li>・対象者の機能や残存能力を踏まえ実際に言語訓練を計画する貴重な経験ができた。</li> <li>・「ふきのとう」は参加学生全員が簡単な参加記録を記載することで、自分の成長も自覚している。</li> </ul> <p><b>【来場者の声から】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学生の考えるレクリエーションは言語の訓練になっており、楽しみにしている。学生ボランティアが運営にとっても良く協力してくれているとの声を頂いている。</li> </ul> <p><b>【総括と評価】</b></p> <p>地域の当事者グループとの関わりを通じ、将来の専門職としての責任とやりがいを経験し、言語聴覚士を目指す学生の成長を促している。</p>	<p>参加学生：コミュニケーション障害学科学生4年次生28人、2・3年次生10人程度、1年次生31人</p> <p>連携機関：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・三原市失語症友の会「こだま」</li> <li>・失語症ボランティアグループ「ひびき」</li> <li>・広島市の高次脳機能友の会「ふきのとう」</li> </ul>
<b>【コミュニケーション障害学科におけるチーム医療の効果と課題についての取組】</b>		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・4年次学生の卒業研究として細川研究室の1人が上記テーマに取り組んだ。</li> <li>・言語聴覚士の視点から見たチーム医療の効果と課題について研究を行った。広島県内の回復期リハビリテーション病棟をもつ病院に勤務する言語聴覚士4人(1施設各2人)に対して、学生が1人30分程度の半構造化面接によるインタビューを行った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・インタビューを依頼するための所属施設宛の依頼状、インタビュー協力者への具体的な協力内容を示した文書の作成などを通して、社会人として求められる文書の作成技能が身についた。</li> <li>・インタビューはそれぞれの施設に学生が伺って実施したが、これらの活動を通して、社会人としての対人マナーが向上した。</li> <li>・学生は卒業後に就職が想定される地域で活動をしている医療機関での業務について一部分だけではあるがインタビューを通して学ぶことができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・参加学生：コミュニケーション障害学科4年次学生1人(細川研究室)</li> <li>・協力機関：広島県内の回復期リハビリテーション病棟を持つ</li> </ul>

事業・取組の名称・概要等	参加学生による取組の成果等	連携機関等
<ul style="list-style-type: none"> <li>このインタビューから4人が共通して述べているチーム医療の効果と課題について分析、考察し論文を作成した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>協力頂いた医療機関に対しては、研究結果（卒業論文）をお知らせすることで、地域で活動をする医療機関内のチーム医療の向上に資することができ、結果として地域住民の健康維持・向上へ寄与することができた。</li> </ul>	つ病院（2施設各2人の言語聴覚士）
<b>【人間福祉学科における地域課題解決に向けた取組：世羅町西大田地区での石像調査】</b>		
<p><b>【取組の概要】</b> 人間福祉学科3年次専門演習Ⅰ・Ⅱ（前・後期）では、地域全体に目を向けて考える力をつけることを目的に、世羅町西大田地区での石像調査を行った。この調査は、平成28年度県立広島大学重点研究事業地域課題研究「新四国八十八ヵ所巡拝案内図（西大田地区）の再興と、それを活用した地域づくり」（吉田倫子・原田俊英・金子 努・國定美香・湯川順子）によるもので、履修学生が中心となって調査協力者として参画した。</p> <p><b>【平成28年度前期授業での取組】</b> 前期・専門演習Ⅰでは、事前準備として調査票の作成、準備等を行い、現地での調査及び聞き取りを行った。本調査に向けての改善点等の抽出も行った。また、調査後には調査票への記入、データの整理等を行った。</p>	<p><b>【現地調査実施】</b>平成28年9月21日～22日 専門演習Ⅰの履修学生及び人間福祉学科2・3年次生7人及び教員2人が参加して1泊2日の本調査を実施した。地域住民の方と一緒に9地区を2日間かけて調査を実施した。2日目の最後の時間には、調査のまとめとして、地域住民の方への報告会を開催した。学生は短時間で各地区の現状と特徴をパワーポイントにまとめ、発表した。</p> <p><b>【調査成果を祭りで展示】</b> 調査で得た成果を限られた住民の方だけでなく、広く知ってもらうために、「西大田ふれあい祭り」で展示報告を行った。展示物の制作や展示作業を専門演習Ⅰ・Ⅱの履修学生らが担った。</p> <p><b>【取組を通じて学生が感じたこと・得たもの】</b> 体験型学習を通じて、地域住民の抱える生活課題をよりリアルに実感することができ、学内での学習に対する意欲が高まった。</p> <p><b>【総括と評価】</b> 地域課題解決のための具体の取組を、体験を通して学修することで、学内での学びがどのように実践に生かせるかを考える機会となった。そしてそのことが自らの課題の認識につながり、学修意欲の向上につながった。 今後はこうした取組を継続性のあるものにしていくことが課題である。</p>	参加学生：2・3年次生7人 連携先：世羅町

事業・取組の名称・概要等	参加学生による取組の成果等	連携機関等
--------------	---------------	-------

資料：「西大田地区の石像調査」（中国新聞 平成28年9月22日朝刊）

**【人間福祉学科における地域課題解決に向けた取組：バリアフリー街点検～平和公園周辺～】**

平成28年4月24日（土）障害者と家族のくらしと権利を守る広島連絡会が主催する『バリアフリー街点検～平和公園周辺～』に人間福祉学科2年次生6人が参加した。  
 この街点検には、さまざまな障害を有する人が参加し、歩道や案内板、トイレのバリアフリー状況の把握、公共交通機関の利用しやすさなどを当事者の目線で点検した。

**【取組の成果等】**  
 参加した学生6人は、各コースのリーダーになり、参加者を誘導し、チェックポイントの写真撮影、障害者やその家族など、参加者の意見を聞き取り、地図に書き込むなど多くの役割を担った。午後からは会場を移しての報告会で、コースの概要や参加者の意見を発表した。また後日、写真や地図、意見等をまとめ、街点検レポートを作成し、主催団体に提出した。

**【参加学生の声】**

- ・知的障害の児童とその保護者たちと一緒に街を歩いて点検し、人が多くいるところの生活のしづらさを具体的に知ることができた。
- ・障害を持った子どもにとって、周囲の様子や環境、社会はどのように見えているのか気になった。いつもなら気になることもない段差や音、バリアフリーに関して興味を持つきっかけとなり、社会には障害を持った方が不便さや苦勞を感じないといけない構造であふれていると感じた。

**【総括と評価】**  
 参加した学生にとっては、大学で学修した知識や技術を実際に活かす貴重な体験になった点で有意義な活動だった。  
 この経験をさらに学内の学修に活かせるよう授業との連携を図ることが課題である。

参加学生：2年次生6人  
 連携先：障害者と家族のくらしと権利を守る広島連絡会

事業・取組の名称・概要等	参加学生による取組の成果等	連携機関等
<b>【人間福祉学科における地域課題解決に向けた取組：ビーチボールバレー大会・食事交流会】</b>		
<p>ビーチボールバレー大会・食事交流会の企画立案・実施・運営を三原市障害者の父親の会と協働して取組んだ。</p>	<p><b>【参加の状況】</b> 平成 28 年 5 月 28 日（土），ビーチバレーボール大会・食事交流会を開催した。当日は，三原キャンパス体育館を主会場として，人間福祉学科の学生 55 人が参加したほか，障害当事者とその保護者・家族などが参加し，交流した。</p> <p><b>【参加学生の声】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・障害のあることを感じさせない元気な様子に，自分のなかにあった偏見に気づかされた。</li> <li>・平等，対等であるとはなにか考えさせられた。</li> <li>・上級生と企画段階から準備することで，みんなで一つの企画をつくることの一体感を感じることができた。</li> <li>・人間福祉学科での学びに対し意欲を高めることができた。</li> </ul> <p><b>【総括と評価】</b> 1 年次の 5 月に開催することで，1 年次生の人間福祉学科での学修意欲向上につながっている。また，上級生との交流が図られることで，人間福祉学科全体の活性化につながっている。</p> <p>また，卒業後の進路決定や現場に従事してからの資質形成にも結び付いている。（参考：入木萌「知的障害者が私の人生に与えた影響ー学生時代のボランティア活動を通してー」『さぽーと』2016. 5 掲載記，pp38-41）</p>	<p>参加学生： 1 年次生 40 人， 2 年次生 6 人， 3 年次生 7 人， 4 年次生 2 人 連携先： 三原市障害者の父親の会 （障害当事者，保護者，関係者等）</p>